

三島由紀夫「美しい星」論

藤井, 哲史
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/16003>

出版情報 : *Comparatio*. 5, pp.163-170, 2001-03-20. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



KYUSHU UNIVERSITY

三島由紀夫「美しい星」論

藤井 哲史

「美しい星」は、昭三七年一月「新潮」に発表され、同年一〇月二〇日に新潮社より刊行された。三島はこの「美しい星」執筆の二年ほど前にA・ミシエル著（田辺貞之助訳）『空飛ぶ円盤は実在する』（高文社、昭三一・六）を読んで以来円盤に対しても関心を抱いたらしく、その後北村小松氏と共に三島宅の屋上で再三円盤観測を行っていた事は周知の通りである（註二）。

それは江藤淳が「あたりから漂つて来る世界の破滅のにおいをかぎながらこの物語を読むのは、また格別の興味がある。」（註二）と云つたように、ついみじくも、キュー・バ危機の最中であつた。「美しい星」はその発表直後から、平野謙の「小説ジャンル拡大への意欲」（註三）、浜野健三郎の「日本文学の新分野」（註四）といつた、幾多の讀辭に囲まれる事となる。それは専ら、「世界を手玉にとるために選ぶアルキメデスの支点」、「機械仕掛けの神デウス・エキス・マキーナ」（註五）として宇宙人を設定したこと、それは正に、人間を俯瞰する為に〈宇宙人〉を用いた事、そのことに拠るものであつた。

そして本作発表より二年後に到つて、この「斬新」と見える構成は奥野健男によつて「新しい政治小説」（註六）としての意味を付与される事になる。無論、又、玉井五一の反論（註七）等がなかつた訳ではない。だが、奥野健男の「政治と文学」理論の破産がその発端となつた（「政治と文学」論争）に於ける奥野への反論は数多く有るもの、事「美しい星」評価に関する限りに於いては、前掲の、玉井の反論が存する程度に過ぎない。それは、野間宏の描く「政治」の〈重み〉や〈リアリティ〉に對して三島のそれは「いささか贋造めき、去勢されたおもむき」で「かなり通俗的な、それらしきもののカムフラージあるいは錯覚」に近いものであるというもので、それは「経験によらず」という表現からも明確なように実体験の有無に係つてのものであつた。だがその実、この論に於ける批判は奥野の表現に対しても集中しており、それ迄の評価を搖るが

すに値するという代物ではなかつた。この新たな「政治小説」という評価は、奥野に先立つて磯田光一が「斬新な政治小説」（註八）として示したものだが、「美しい星」評価は奥野に到つて「新しい政治小説」としての定着を見たと謂つて差し支えないだろう。

この奥野の一連の発言をエポックとして、その後に本格的な作品論が提出されるわけだが、既に同時代評に於いて、私が俎上へ載せんとしている一つの問題が提起されている。それは、本作の中心である大杉一家各人が夫々異なる星を故郷として持つという設定の必然性の問題である。この点に関して奥野は、「この小説が幻想的な物語であるとの宣言であり」「SF的事実性からも束縛されまい」（註九）とする為であると謂い、栗栖真人を始めとする近年に於ける解釈では、「宇宙人たることの絶対的孤独を象徴する」為であるとされる（註一）。確かに暁子が兄の一雄に懷いたように、大杉一家は互いが宇宙人であることを懷疑しており、又、栗栖も引用したように、「大杉家は人間界の孤独は脱したかもしれないけれど、その代りに惑星間の孤独を知つた。」（第三章。傍点ママ）と云う一節さえある。だがそれにも拘らず、この「必然性」という点に於いては未だ疑問の余地を残している。それは詰り、羽黒真澄を中心とする「薔薇園会議」の三人が「白鳥座六十一番星あたりの未知の惑星」をその故郷としたように、他の星をその故郷とする余地を残しながらも、他でもない太陽系惑星を彼らが何故自身の故郷として設定したのかと云う「必然性」、その事が問題なのである。

註一 円盤に対しても関心を抱いていた事に就いての三島自身の発言に、「空飛ぶ

円盤」の観測に失敗して——私の本「美しい星」（『読売新聞』昭三九・一・一九）、「空飛ぶ円盤と人間通——北村小松氏追悼」（『朝日新聞』昭三九・四・三〇）、「社会料理三島亭」中の「宇宙食「空飛ぶ円盤」」（婦人俱乐部部）昭三五・九、「三島由紀夫」（山本容朗『現代作家』その世界）翠楊社、昭四七・九）、「インタビューア」人間好きで人間嫌いの立場——生活は、文武両道で」（時（Epoch）昭三八・一）等がある。

註二 江藤淳「芸術評（上）」（『朝日新聞』昭三七・一一・三）

註三 平野謙「今月の小説 ベスト3（下）」（『毎日新聞』昭三七・一一・二）

註四 浜野健三郎「日本文学の新分野——三島由紀夫著「美しい星」」（『Epoch』昭三八・一）

註五 無署名「書評」(「群像」昭三八・一)

註六 この時期の奥野健男の「美しい星」関連発言に、「政治と文学」理論の破産」(「文芸」昭三八・六。後『文学は可能か』角川書店、昭三九・五へ所収)、「政治的文学」批判」(「文学」(岩波書店)、昭三八・六。後『文学は可能か』角川書店、昭三九・五へ所収)、「政治と文学」再論」(「週刊読書人」昭三八・一〇・四。後『文学は可能か』角川書店、昭三九・五へ所収)、「新しい政治小説」(「文芸」昭三八・一二。後『美しい星』論と改題し、「文学は可能か」角川書店、昭三九・五へ所収)等がある。

註七 玉井五一「贋造された「政治」と「美」——三島由紀夫『美しい星』批判」(「新日本文学」昭三八・九)。

註八 磯田光一「斬新な政治小説」(「日本読書新聞」昭三七・一一・二六。後「新しい政治小説」(『美しい星』について)と改題し、「殉教の美学」冬樹社、昭三八・六へ所収。)

註九 奥野健男「新しい政治小説」。註六参照。

註一〇 栗栖真人「虚無への誘い——三島由紀夫『美しい星』論」(「別府大学国語国文学」昭五九・一二)。尚、他にも、「彼らの故郷はそれぞれ別の惑星なのであって、そのことにおいて、彼ら自身それが絶対的な孤独を背負わされ、ゆえに彼らはせめぎ合い、また懷疑し対立せねばならぬ。」とする川島秀一「美しい星」——SFの遠近法」(「国文学」平五・五)の論等がある。

二
処で前章に於いて提示した問題に関して私は、若干の付言をしておかねばなるまい。先に私は、何故太陽系の諸惑星を大杉一家の各人がその故郷とせねばならなかつたのかと云う「必然性」の問題を示した訳だが、それは矢吹省二が、大杉重一郎の円盤体験を「マンダラ・イメージ」を用いて解釈しようとした如く(註二)、また、有元伸子がユングの『空飛ぶ円盤』を用いながら、大杉重一郎の円盤体験を「一種の「心理投影」」として解釈した如く(註三)、作品内の階層のみで解釈を付けんとしている訳ではない。仮に先の問題を、(何故に大杉重一郎は自身の故郷として火星を選択したのか)と云う形式で問うならば、それは当時の、一般的な「宇宙人」に関するイメージの反映を大杉重一郎の言動に見るより他ない。

故に先の問題は、(何故に大杉重一郎は自身の故郷として火星を選択したのか)ではなく、(何故に大杉重一郎は自身の故郷として火星を設定されたのか)と問われるべきである。

扱てこの問題に就いて考えるに際し、初めて円盤を目撃し、自身が宇宙人である事の自覚を持つに到る場面へと目を向けるわけだが、本作は大杉一家四人が円盤観測の為に羅漢山へ向かう場面より幕が上げられる。山頂に於いて円盤の飛来を待つ間にその経緯が述べられるが、前節に於いて示した問題を解く鍵は正に暁子の存在にあると謂つてよい。その事は各人の円盤目撃に就いて、一雄と伊余子とのそれが容易に片付けられる事に對し、暁子のそれは重一郎に次いで重きを為している事にも看取される。暁子は冒頭の描写に於いて、「黙りがちな美しい娘」、「その白い美しい顔立ちは夜目に鮮やか」だと語られ、その後には以下のように記される。

自分が金星人であると知つてから、暁子は日ましに美しくなつた。

もともと美しい娘だつたが、(中略)その美しさが金星に由来してゐると知ると、暁子の美しさには忽ち氣品と冷たさが備はつた。

(第一章)

暁子が自身の故郷だと考へてゐる金星が表徴している神は、野尻抱影『星の神話・伝説集成——日本及海外篇』(註三)に扱ればアプロディーテー(ローマではウエヌス、英語読みではヴィーナス)であるが、吳茂一著『ギリシア神話』に扱れば、アプロディーテーは先ず第一に「美と愛欲との司神、ことに女性の美しさの典型」、第二に「大地の豊饒、人畜の蕃殖を司る、いわば大地女神」、第三に「航行の安全を護り、水夫たちの危難を救う女神」の性格を有するとされる(註四)。そして、これらの中の第一の性質を暁子が有している事は言を俟たない。而してその事は、彼女が「純潔」を志向する点に関する叙述に於いて、作者をして以下の一節を加えさせる。

金星の純潔とは一つの逆説である。しかし暁の冷氣に浴してあらはれたその姿は、フェニキヤの沖の緑の泡から生れ出た時の女神と同様で、愛欲のおぞましい法則をまだ何一つ知らぬげに見えた。

(第二章)

此處にも述べられている通り、「金星の純潔」とは「一種の逆説」である。そしてその事は当然、金星と云う星を背負つてゐるにも拘らず「純

潔」を志向する暁子にも当嵌るであろう。主人公の重一郎は兎も角、暁子が重きを為していいる所以は、それが単に暁子の円盤目撃に関してのみならず、〈暁子と美と金星との聯関〉に迄及んでいる為であり、それは星に纏わるギリシア神話をその性格付けとして賦与された、その事の重みなのである。その事は、次のような一節にも看取される。

暁子は胎教にと父にすすめられた星の神話や伝説の本の頁を読むともなしに繰つてゐた。父は不正確な人間どもの天文学を軽蔑してゐたが、神話や伝説の端緒にはかつて宇宙人の与へたイメージがあると信じてゐた。暁子は冠座の星についての「星の花嫁」といふアメリカ・インディアンの伝説が好きだつた。

(第二章、傍点稿者)

この話は野尻前掲書にも、「かんむり座」の項に「星の花よめ」の題で記載されているものである(野尻前掲書、一三四頁)。本作には、〈ギリシア神話〉をその代表とする「星の神話・伝説」が色濃くその影を落としているのであり、殊に暁子は金星に表徴されるアプロディーテーの最も明瞭な形式なのである。だが寧ろ此處で重要なのは、先の言葉に示される「美貌」ではなく、吳が挙げる處の第一の性格に於ける「愛欲」である。無論先の引用の「何一つ知らぬげに」と云う言辞は(知つてゐる事)を前提としたものであり、「愛欲のおぞましい姿」を自身の裏に包蔵させていることを意味している。此れは「金星」に就いてのものであるが、「欲のない娘でありながら、彼女には、むりに欲望を拒絶してゐるやうに見える利点があつた。」(第一章)と云う一節をも勘案すれば、先の「金星」に就いての評言は暁子に就いてのそれだと謂つてよい。ヘーパイストスをその夫としながらアレースと密通したアプロディーテー同様、暁子はその〈淫奔〉を潜在させてゐるのである。而してこの事は後に、竹宮と円盤を目撃した前後の事情に就いて母の伊余子に問質される場面に於いて明瞭となる。

暁子の実在はあのとき竹宮と共に飛翔してゐた。魂は完全に満ち足りて、一つの音樂のやうになつて、清らかさの極みが、肉欲の渾に織り成され、……暁子の実在は、何一つ形の定かでない眩ゆい快い光輝に包まれてゐた。

(第六章、傍点稿者)

次に暁子の兄である一雄だが、彼は自身の故郷が水星であるとされる。水星が表徴している神は、野尻前掲書に拠ればヘルメース(ローマでは

メルクリウス、英語読みではマーキュリー)であり、ヘルメースは「神々の伝令神」で、「天界地界の間を自由自在にとびまわつて(中略)機智や敏速を必要とする雄弁家、医師、旅行者、さては山師、ぬすびと、すりの守り神だつた。」(野尻前掲書、二七〇、二七一頁。傍点ママ。)とされ、吳前掲書に於いても、「神々の伝令使、あるいは飛脚」で、「雄弁、音樂、計数等の神」(吳前掲書、上巻、一五一、一五四頁)とされている。この性格は一雄に於いては、保守党の政治家である黒木克巳の私設秘書としての役回り(第七章)と重なろう。

妻の伊余子は、木星を自身の故郷とされているが、木星が表徴している神は、野尻前掲書に拠ればゼウス(ローマではユーピテル、英語読みではジューピタ)であり、ゼウスは「オリンポスの最高神」で、「正義の神であると共に、雨の神、あらしの神、雷の神で、その手に、雷電を打ち出す武器を持っていた。そしてわしを使者として、下界の隅ずみまで知らぬことはなかつた。」(野尻前掲書、二七八、二八〇頁)とあるが(註八)、その性格上伊余子は、暁子が金沢旅行で竹宮と共に円盤を目撃した事を、或いは暁子が妊娠している事を、家族の誰より逸早く知る(それは暁子宛の竹宮からの手紙を盗み詠むと云う、姑息な手段ではあるが)と云う役割を充てられているのである。また、そのゼウスに就いて吳前掲書では、ゼウスは「オリュンポスの親族の長」で「本来天空とその輝きを表徴する神格」であるとされ、加えて以下のように詳述されている。

しかしひゼウスが司るのは、天候や雷雨だけではない、空を支配するものは、全世界を統治する者であつた。(中略)また大にしては国境を、小にしては個人の所有地を保護し、濫りに犯すことを許さないのも、一家の最も神聖な場所である火処、hestiaを護る者も彼であり、(中略)要するに人間社会のあらゆる紀綱や秩序、それらは悉く彼の手に掌握されていた。

(吳前掲書、上巻、五八〇、六二二頁。傍点稿者)

この「火処、hestiaを護る」と云う点に関しては、もし良人のいふやうに世界が改善され、平和が確立したら、彼女はその改良された世界の整然たる家事を受け持つだらうと思はれた。(中略)いづれは惑星の諸々方方に、彼女は台所を持つことになるだらう。しかし木星の台所と、地球の台所と、その二つですら、伊

余子は自分が手落ち泣く管理できるかどうか自身がなかつた。

(第一章)

と云う伊余子に関する叙述との照應を見せていて、此れ迄見てきた事より、当初の問題に就いて結論を導くとすれば、大杉一家各人が太陽系の惑星を各々の故郷としている事は、夫々の惑星がその表徴とされるギリシア神話の神々の性格を賦与されている事に起因するのであり、その事に因る性格付けは既に第一章に明瞭に示されているのである。かかる点に於いて、本作の発表直後に江藤淳が渢らした「S F 仕立の力を借りて作者が読者の注意を集めようとしている神話」(註五)と云う言葉は卓見であつた。

註一 矢吹省二「ある悲劇の分析——三島由紀夫『美しい星』考」(国学院大学紀要)平元・三)

註二 有元伸子「三島由紀夫『美しい星』論——二重透視の美学」(金城学院大学論集国文学編)平三・三)

註三 野尻抱影『星の神話・伝説集成——日本及海外篇』(恒星社、昭三三・二)。尚、島崎博・三島瑠子編『定本三島由紀夫書誌』(薔薇十字社、昭四七・一)には本書の他に、野尻抱影『星の神話・伝説』(白鳥社、昭二三・七)の書名も見える。以下、「野尻前掲書」と略示する。

註四 吳茂一著『ギリシア神話 上・下』(新潮社、昭三一・六(上)。昭三一・八(下))。引用は上巻、一三三一~一三四頁。本書は、島崎博・三島瑠子編『定本三島由紀夫書誌』(発行所・発行年月は、本節の註三参照)にもその書名がある。以下、「吳前掲書」と略示する。)

註五 前掲江藤論文。前節の註二参照。傍点稿者。

扱て重一郎へ移る前に、竹宮と云う存在と、其れに付随する問題に就いて確認しておきたい。前節に於いて私は、暁子は「その〈淫奔〉を潜りさせている」と述べたが、その〈淫奔〉な性格を〈顯在させている〉存在が竹宮である。「趣味の友」へ掲載した「宇宙友朋会」の通信欄を通じて暁子と知り合つた、自称「金星人」であると云う青年であるが、そ

三

の後二人は長い文通期間を経て金沢で対面し、内灘の砂丘で共に円盤を目撃する事となる(第三章)。竹宮に就いては、その後の第六章での暁子の妊娠に付随して、良家の子息のように言い繕つていた事、元赤線のキヤバレエとの女と失踪したらしいと云う事が、仙鶴楼の内儀の口を通じて明かされる。故に我々がこの内儀の言葉を仮にも信じるのであれば、竹宮は、暁子の〈淫奔の潜在〉とは対照的な〈淫奔の顯在〉としての存在である、と云い得るのである。

だが我々がこの内儀の言葉を信じるにせよ、其処には彼がこの地上に於いて、良家の子息のように嘘を吐いていた事、また突然に失踪してしまった事をしか示さない。竹宮に就いては、「果たして竹宮は人間なのか、宇宙人なのか」と云う問題が池田和臣によつて提示されている(註)。

先ず以て、私は前に、彼が「〈淫奔の顯在〉としての存在」である事を確認した。無論、竹宮がこの上ない美貌の青年であることをも勘案すれば、竹宮は間違いなくアプロディーテーの性格を賦与されているのであり、金星をその故郷とする金星人であると言い得るのである。ただ先のようない竹宮が金星人である事の真偽に関する問題が提出されるのは、第四章に於いて一旦は「もし二人が一緒に円盤を見たことが本当とすれば、それは金沢の男が金星人だといふ証拠に他なるまい」(傍点ママ)と独白していた重一郎が、第十章では暁子へ「あの男は地球人の女たらしだつた。」と告知する、その一言に因るのである(勿論それ以前の第六章に於いて、「重一郎自身はもう信じてゐない竹宮の金星人であることを」と云う一節、また、第八章の「暁子は人間に欺されたのだから、もつと人間のことを学ぶべきだつた。しかし良人に固く口止めされてゐたので、さういふ風に娘を説得することはできなかつた。」と云う一節さえ有る)。無論、竹宮自身が金星人である事は竹宮自身の口から語られる内容であり、それは仙鶴楼の内儀の口を通して語られる内容と対置され、相対化されるのであり、これとて結論を導き出す要素とは為り得ないのである。

此処に至つて私は、本作に於ける語り手の態度に就いて触れておかなくてはなるまい。先の竹宮に就いての重一郎の「あの男は地球人の女たらしだつた。」と云う一言は、飽くまで重一郎の認識の裏に於ける解釈の変転を示すに過ぎない(先に、補足した二例に就いても、然りであり、前者は重一郎の認識の裏であり、後者は伊余子の認識の裏にあるものである)。そこで本作に於ける語りへと目を向ける訳だが、この語りから

先の眞偽に関する解答を導き出すのは困難であろう。抑々の初めより、それは竹宮に限らず、この大杉一家全員、薔薇園会議の三人組、政治家の黒木克巳に關しても同様である。彼らが宇宙人である事の眞偽に就いて、語り手は一向に關与しない。先行研究に於いては、竹宮に關し「地球人の女たらし」という解釈が通説であろうが、それは其れ丈、重一郎の認識を「作品内世界に於ける客観的眞実」として扱っている事を物語つてゐる。だが仮にもそうであるならば、「その（稿者註 黒木の）戻つて来かかる影の素早さに、一雄は一瞬、異常なものを感じた。（中略）しかしそのとき、一雄はふと、この人も宇宙人ではないか、と疑つた。」と云う一雄の認識をも「作品内世界に於ける客観的眞実」として宜うべきであろう。この点に就いては、黒木の許へ来た羽黒一派を一雄が案内している場面に於いて、羽黒が洩らす以下の言葉が、その確証となろう。「しかし黒木さんに会つたのはよかつたね。これでやつと道がひらけた。いつかは私も同郷人に会へると思つてゐたんだが」

（第七章、傍点ママ）

この羽黒の一言は「語り」ではない。だが、相関与せぬ部分に於ける一雄と羽黒との、この言葉の一致と云う点に於いて、羽黒の一言は「第三者」の言として、黒木が宇宙人である事の「客観性」を存立させるのである。だが以上の如くして示された「客観性」の故に、私は早計にも「黒木克巳は宇宙人である」等と謂わんとしている訳ではない。私が此処で確認しようとしているものは、「語り手」の姿勢の問題である。而してその「客観性」と云う事を「語り手」の問題へ置換するとすれば、「語り手」の語る内容を、第三者も同様に確認し得る「客観的事実」（それは飽くまで作品内での事柄としてであるが）のみを述べたものとして捉えるか否かと云う問題へと移行する。仮に「語り」が、重一郎らの一種の思ひ込み的な「主観的幻想」をも「作品内に於ける客観的事実」と同等の重みで包含したものとすれば、前節で触れた矢吹論や有元論のように、重一郎らの「主観的幻想」の抛つて来る所を探り、それを我々の納得し得る地点にまで到らしめると云う形式の論が表れるのも然るべきである。だがもし夫れを、大杉一家や羽黒一派の円盤体験（其れは暁子と竹宮と一緒に円盤を目撃した事をも含めて）を第三者も確認し得る「作品内に於ける客観的事実」として捉えるとすれば話は異なる。其処には、先に矢吹論や有元論が示した如き吾人に納得のゆく根拠など有る筈はなく、

ただ事実のみが有る許りである。前述の黒木の問題に話を戻すとすれば、一雄の認識が偶然にも「客観的眞実」との符号を見せたとも考え得る訳である。而してこの事は、重一郎他各人の認識に就いても、同様に言及され得る事なのである。

本作に於ける「語り」は、登場人物の謂わば「人間臭さ」をこの上なく示す一方で、彼らを「遠い金星の故郷を同じくする一人の宇宙人」（第三章）、「火星から来た父」（第四章）、「この男女の金星人」（第四章）、「このドメスチックな木星人」（第六章）等と呼ぶのであり、それは数えるに暇がない。そしてこれらのことより前述の「語り」の位相の問題に結論をつけるとすれば、以下のようになろう。それは詰り、これらの表現は、語り手が重一郎らに對して人間である事と神である事の両者を宜つてゐるのであり、「現実」と「超現実」との境界の曖昧さを露呈していると云う事である。それが最も顯著に垣間見えるのは、先に挙げた第八章の「暁子は人間に欺されたのだから、もつと人間のことを学ぶべきだつた。」と云う一節である。この一文は、直後の「しかし良人に固く口止めされてゐたので、さういふ風に娘を説得することはできなかつた。」と云う一文により、伊余子の認識として首肯され得るが、先の一文のみから断ずれば、それは純粹な「語り」として判断され得るものもあり、此処には「語りの位相」の揺らぎが確認される。この事を先の竹宮が宇宙人であるか否か、と云うことには、竹宮は暁子を欺した「人間」であると云うことと、暁子と同様の「金星人」であると云うこととの双方を共に肯定した形でこの話は我々に「語られる」のであり、竹宮の実態は明確にされぬまま彼の姿は雲散霧消してしまう。詰り、本作の「語り手」は、此等の登場人物を人間であるとも神であるとも判断を下さぬ曖昧な態度のまま結末部の円盤体験へと吾人を誘引するのである。

註一 池田和臣「美しい星」（隠された古典——小説に見る物語要素・類型）（「国文学」平五・五）

火星が象徴している神はアレース（ローマではマルス、英語読みではマーズ）である。アレースは「軍神」で、「女神アテーナが正義の戦いをつかさどるに対し、善惡の差別なく血なまぐさい野蛮な戦いをつかさど」（野尻前掲書、二七五～二七六頁）る神だとされ、吳前掲書に於いては、以下の如く詳述されている。

本当のアレース神自体はあまりよい待遇を受けず、ギリシア方の勇士ディオメーデースに傷けられたり（筆者註 人間にである）、アプロディーテーと密会のところを見つかつて、酷い目に逢わされたりする。（中略）伝説でも、アレースはむしろ不名誉な役割を引受けていることがしばしばである。

（前掲書、上巻、一六〇～一六二頁）

私は此れ迄重一郎とギリシア神話中のアレースとの関連に就いて触れる事を故意に忌避してきた嫌いがある。それは、先の引用にも示したアプロディーテーとの密会に就いては、「今度は実の娘と夫婦にでもなつてゐるんだらう」（第九章）という床屋の曾根の揶揄にその反映が見られる等の、細微な点に於ける照應は確認されるが、重一郎の場合、アレスとの照應に乏しく、その反映は極めて希薄である。否、希薄であるどころか、アレース本来の「善惡の差別なく血なまぐさい野蛮な戦いを」司ると云う性質とは、対照的な性質であると謂わざるを得ない。重一郎は確かに世界平和の為に世間の無知と、直接的には羽黒一派との「戦い」に臨む訳であるが、重一郎の立場の善惡は兎も角、「血なまぐさい野蛮な戦い」とは言い難いのであり、それは寧ろ、「地球を破壊する道具を、三

人思ひ思ひの考案で、百円以下の予算で買ひに行」く事を企てたり（第五章）、「車裂きや牛裂きや、中国のすばらしい天才的発明である陵遲や、火焙りや磔刑や、あらゆる血みどろの処刑が復活される。」（第九章）等と口々に喚き立てたりする羽黒一派にこそ相応しい。

世界平和を推進する大杉重一郎と、世界を「安樂死」へ導こうとする羽黒との二人を神とすれば（以下の場合少なくとも、重一郎は火星の象徴するアレースではなく、木星が象徴するゼウスをその性格として考えるのが妥当であろうが）、二人の論争は、ゼウスとアプロメーテウスとの争いに重ね得るであろう。或いは、人類に対して「峻厳であり時に苛酷」さえあつた時期のゼウスと、その後に「人類ならびに全世界に対して寛容の政策を執り、正義をもつて統治する」ゼウスとの自問自答にも重

ねられ得ると解釈しても良い（註二）。

羽黒一派（或いは其処へ、政治家の黒木克巳をも含めても良いと稿者は考へている。その根拠に就いては、前節を参照。）がその故郷とする「白鳥座六十一番星の未知の惑星」である事は、その意味に於いて象徴的である。白鳥（白鳥座）に纏わるギリシア神話は、主として次の二つが挙げられる。一つは「この白鳥は、大神ゼウスが、スバルタ王ティエンダレウスの后レーダーのもとへ通つたときの姿」（野尻前掲書、一七五～一七七頁）であると云うもので、吳前掲書にも「（稿者註 ゼウスが）白鳥と化して抱擁したレーダーの子カストールとポリュデウケース、すなわち双子神ディオスクーロイ」（吳前掲書、上巻、六八頁）、「レーダーが白鳥の翼に抱きすくめられていた（吳註 ゼウスの情事を描く。）」（吳前掲書、上巻、八八頁）とある。「白鳥」がゼウスの姿を変えた形であるとするならば（加えて、重一郎が火星ではなく、木星の象徴するゼウスの役割を担つてゐるならば）、重一郎と羽黒・黒木はゼウスの表面と裏面と云う対照関係と同じであると云うことになろう。先程私が「ゼウスの自問自答」に譬えた所以である。特に大杉重一郎と羽黒真澄との、二章に亘る論争は、その事を強く物語つている。根本的な部分に於いて彼ら二者の思想は同様の一点に根ざしている事にも表れていよう。

無論、「白鳥」はゼウスの裏面を意味するのみではない。「白鳥」に関する限り、羽黒の抱くような「白鳥……その輝く純白の邪惡のすがた」（第五章、傍点稿者）と云うイメージはこれまで存しておらず、本作に於いて「白鳥」は一帯に瀰漫する「惡」の象徴としてある。そしてその事は、竹宮と金沢で直接会う為に暁子が乗る乃至は竹宮を探しに金沢へ出向く為に重一郎が乗る「特急「白鳥」」、又その背景としての天空に幻出する「白鳥座」に極めて象徴的である。

暗いホームの片隅で人目にはありふれた密会のやうに見えただらうが、折しも天頂からは白鳥座やペガススの大方形が、露天のホームで今し行はれる、宇宙にとつてはまことに公的な出会いを見下ろしてゐた。

これまで重一郎と羽黒とが相互補完的な関係にあることに就いて触れたが、それは飽くまで重一郎がゼウスの性格を有していることを仮定しての事である。抑々、伊余子の背負う木星に纏わる神、ゼウスの性格こそが一家の家長たる重一郎の賦与せらるべき性格であつた。何故な

らば、ゼウスこそが「オリュンポスの神族の長」であり、「神々のまた人間たちの父、父なるゼウス」だからである。にも拘らず、重一郎の故郷が火星であると云う事は、以下の事を示唆するのである。それは詰り、重一郎がアレースの星である火星を背負わされたと云うよりも寧ろ、ゼウスの星である木星を篡奪されたと云うことなのである。

註一 この点に就いて、重一郎と羽黒との論争をゼウスとプロメーテウスとの争いに比するとすれば、人類救済の立場をとる重一郎はプロメーテウスの性格を有し、羽黒がゼウスに相当する事となる。

五

扱て私は第三節に於いて竹宮の宇宙人としての存在の真偽に就いて触れたが、その問題は、竹宮のみならず、重一郎にも言及されねばならぬ問題である。否、大杉一家全員に就いて言い得る事もある。重一郎は〈語り手〉に「火星人」であると度々称されながらも、最終章に至っては、「美のせあだ、美のやつが孕ましたんだ」と「父性、愛に溢れた怒り」の言葉を呴き、病床では娘の暁子の手に「衰へた熱い、異臭を発する人間の背中」の感触を与える。だがこの点を指して重一郎を単なる「癌患者」として扱うことを、私は好まない。それはアプロディーテーと密通の現場を押さえられ、他の神々の面前で恥辱を受けるアレースを捉まえて、「野暮な浮氣男」と評するに等しい。而して一家の他の構成員もまた、同様である。野口武彦をして「病人と妊婦と敗者の集まり」と言わしめたように、また、三島自身が「人間の絶望の果ての果て」^(註)と洩らした如く、大杉一家の各人が人間的不幸の只中へ身を置くことになる。だが、ここで重要なのは、彼らが人間的不幸へ身を置く事にもまして、各人が各々自らの「聖性」の有無に就いての懷疑にまで思い到らせられるという事である。暁子は同郷の金星人として「感応」した竹宮が地球人であつたと思い、一雄は「伝令使」としての役を逐つて人間の「支配」に対する諦念を持ち、全てを把持しているとの自負を抱いていた伊余子はその「矜りを傷つけ」られる。そして彼らの抱く不安を総括するか如く、重一郎は次のように思うのである。

彼は漠然と、人間とはそんな風にするものだと考へてゐたが、こんな即興的な聖性が生れる媒ちは、あるひは暁子があれほど力強く語つたやうに、人間存在の「嘘つきの微風」かもしれないのだ。

(第十章)

〈語り〉は彼らが宇宙人であるとも人間であるとも結論を出さぬまま、謂わばその懸隔を彷徨する地点に於いて語つてきたわけだが、此処に至つて彼ら自身の意識は、彼ら自身が「人間存在」である事を認識し、「聖性」を有さぬ者としてそれを「夢み」るるのである。

かかる状況の下、重一郎は天からの声を聴き、大杉一家は一家揃つて再び円盤観察へ出かける。それは当初円盤観測の為に一家が赴いていた羅漢山ではない。東生田の「一段高い平坦な丘」であり、それは正にアレースが血族殺しの罪で裁かれたという「アレースの丘」に他ならない。而してその丘で彼らは以下の光景を目の当たりにするのである。

円丘の叢林に身を隠し、やや斜めに着陸してゐる銀灰色の円盤が、息づくやうに、緑いろに、又あざやかな橙いろに、かはるがはるその下辺の光りの色を変へてゐるのが眺められた。
(第十章)

この円盤目撃が、彼らに下された裁きとして有する意味は自ずと明らかである。

抑々、「聖性」は重一郎のそれに代表されるが、重一郎は〈見神体験〉とも云うべき円盤体験をし、その折に「至福の感じ」を受ける。それは、「このやうな世界をわが目で見てをり、そののちそれを失つた」と云う〈郷愁〉とも名付くべき性質のものであり、その〈郷愁〉は、重一郎の場合、「火星」へと収斂する。その思いは重一郎に限らず、家族全員が同様なのであるが^(註)、還元すれば彼らには、円盤の目撃体験が自らの「聖性」を明証するものとしてある。此処で話を結末部へ戻すとすれば、彼らは最終部に至つて自らの「聖性」を確認したという事になるであろう。最後の審判に於いて彼らは、「聖性」を有する者として再認されたのであった。

だがこれまでの考察は、飽く迄作品内世界の階層の事象を論理的に意味付けたに過ぎない。これまで述べてきた、ギリシア神話の神々と大杉一家各人との性質的一致に対し、重一郎とアレースとの性質的一致の希薄さや、大杉一家に対する〈語り〉の搖らぎや、又大杉一家各人の自身の「聖性」に対する疑念は、同じ一つ根から発している。それは詰

り、彼らが「人間」でもあり、〈宇宙人＝神〉でもあるという事なのである。それは吳が前掲書に於いて「古代ギリシアの人々が（稿者註）天界の統治体制を）そういうふうに考えついたのは、その頃のギリシア各部族の社会機構を神界に移し、理念においてこれを支え運営していくた精神的オーガニゼーションを天上に再構成したにすぎない」（二五頁）と言つた事と同程度に於いてである。ただギリシア神話に於ける神々の場合には、その形容として「不死の」という語が冠せられるが如く、彼らは超自然的な力を賦与されてある。それに對して大杉一家の各人は、従来の論に於いても繰り返されてきたように、その超自然的な力を全く剥ぎ取られている。そして彼らは、作品内世界に於いても、第三者から認められる事のない部分である、円盤目撃や同類の宇宙人を見分ける能力といつた部分に於いてしか、その超自然的能力を發揮できない。それは近代科学と合理主義とに於いてのみ意味付けられ得る現代での〈神〉の存在の困難さを示している。大杉一家は結末部に於いて円盤によつて救済されるかに見えるが、それは救済であろうか。人生の敗者としてしか意味付けられない彼らは、かつて統治していた筈の人間の手により逐われ、遁走せねばならなかつた。それは正に、〈神〉が〈神〉として存在し得ぬことの悲劇であつたのである。金星への有人飛行が成功し、「他の天体に人間はいるか」（註三）と「宇宙人」の存在に就いて大真面目な議論が為される中、乃至は、「聖性」というものが完全に排除され、〈神〉の存在する余地を有さぬ状況の中につつて、本作は二重の意味で〈皮肉の神話〉としてある。そして、重一郎の論理を様々な理論を用いて共通理解の下に曳き出さんとした論が出たことも亦、皮肉な事であつた。

註一 三島由紀夫「空飛ぶ円盤」の観測に失敗して——私の本「美しい星」。初

出・発表年月に就いては、第一節の註一参照。

註二 本作第七章には、「円盤を目にしたときの至福の感じ、（中略）そこまでは大杉家の人たちはみな同じであつた。」とある。

註三 「他の天体に人間はいるか」（朝日新聞）昭三六・二・一一一四。四回連載。）